

【優秀賞】

子育てを子ども側から見てみた

森文香（福井県 福井県立藤島高等学校 1年生）

ほめられて育ちたいか、叱られて育ちたいか。これはなかなか難しい質問である。私の話をしよう。私はほめられて育った典型的なパターンの人間である。正直に言って私の両親はとても優しい。全然怒らないと言ったら嘘になるが、頻繁にほめてくるタイプだ。私はそれに救われているし、そんな両親で良かったと思っている。

ある日、本屋に行ったとき私の目に飛び込んできたのは衝撃的なタイトルだった。「子どもはほめるとダメになる」目を疑った。これでは私はダメな子どもの一人なのか。好奇心と共に私の手は動いていた。これが私とこの本との出会いだった。

そもそも、ほめる子育ての起源はアメリカ。日本には何でもアメリカをモデルにしようとする風潮があるから、海を渡ってやってきたらしい。強い人間へと鍛え上げる厳しさのある父性社会で、ほめることを中和のために用いるアメリカ。どんな人間も丸ごと包み込む優しさがあり、それゆえ甘えが通用してしまう母性社会、日本。こんなに違いのある国の間で、日本はアメリカの「ほめる子育て」だけを取り入れた。違う土台で同じことをしても上手くいくはずがない。そんなことも知らず「叱らない子育て」「ラ

クな子育て」などと多くの本が出版され、多くの子育て世代の興味を引いた。こんな風にして今の主流であるほめる子育てが浸透した。

「注意されることは攻撃されること」この本にはこんな言葉があった。この言葉は私にはよく響く。きっとほめられて育った代表だからであろう。私にとって叱られるというのは、自分に気を与えてくれたり行動修正のきっかけをくれるなどというものではない。どちらかというと怒っていることが怖くて注意が耳に入ってこない。いわば私は傷つきやすい人間である。こう書き連ねていくと、あたかもほめる子育てが悪くて自分のことを否定しているように見えるが、私はそうは思わない。

子育ての本は結局親のことばかりだ。子育てを育てられる身から見た本は数少ない。子どもがいての子育てなのに。正直なところ、私はとてもいい環境で育ったと思っている。経済的なこととかではなく、子育ての面だけ。両親にほめられて育った私自身、ほめる子育てに満足している。なのに他の大人に、ほめると子どもはダメになるなどと言われたくはない。私の本音だ。

でも、私はこの本を読んでいくにつれて筆者が言おうとしていることが分かった気がした。「親は子どもがぶつかる『壁』として立ちほだかる厳しさと覚悟を持たねばならない。」心に突き刺さった。親という立場の厳しさを知った。親は親なりに苦労している。私たちのことを第一に考えてくれている。「子どもが一歳なら、母親はお母さん一歳だ。」これもよく聞く言葉だが、子育ての核心だと思う。子どもがいての子育て、親がいての子育てだ。筆者は「子どもをほめるな」なんて言っているのではない。きっと親たちに子どもを思う強さを持ってほしいと言っているのだ。私の両親には優しさがある。強さがある。十五歳の私に子育て第

二ステージとして両親にしてあげられることはあるだろうか。

ほめて子どもを育てる親には守る強さがある。自立的な強い人間を育てる強さとはまた違う、美しい強さだ。私はそれを感じて育った。私がこれから恩返しとしてではなく、子育て第二ステージとしてできること。それは親の背中を学ぶことだ。親の強さを学ぶことだ。今まで親から当然のように受けてきた子育て。高校生になった私に必要なのは自分から受ける子育てだ。自分で両親から何かを得られたとき、大きく成長できるにちがいない。きっとそれが「子育てを育てられる身から見る」ということだ。

私は他から見ると「やわ」かもしれない。打たれ弱いかもしれない。でもそれは良さである。両親がつくってくれた優しさでもある。この先私は自分を育て続ける。何十年も自分を良くしていく。両親の大切さと感謝の心を強く感じた高校一年生の夏だった。

書名…ほめると子どもはダメになる

著者…榎本 博明